

見えてきた

讃岐国府跡

香川県埋蔵文化財センター
讃岐国府跡探索事業

讃岐
国府跡

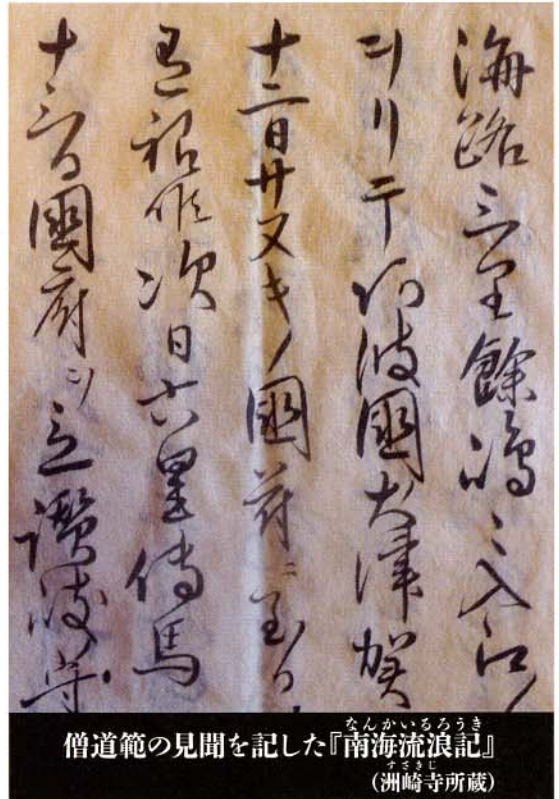
香川県埋蔵文化財センターでは、平成21年度(2009)から讃岐国府跡探索事業を始め、さまざまな調査を行ってきました。これらの調査を通じて、埋もれていた讃岐国府跡の姿が、少しずつ浮かび上がってきました。ここでは、過去の調査成果の再評価もふまえ、主に発掘調査の成果を紹介します。

讃岐国府跡への アプローチ

奈良時代～鎌倉時代(約1,300～700年前)に存在したと考えられる、^{さぬきこくろ}讃岐国府。それは、古代国家の成立とともに設けられた、讃岐一国を統治する役所でした。^{すがわらのみちざね}菅原道真(845～903)が国府の長官である讃岐守を勤め、保元の乱に敗れた崇徳上皇(1119～1164)が晩年を過ごし、^{こうやさん}高野山の^{どうほん}高僧道範(?～1252)が訪れた場所です。約600年も続いた讃岐国府跡の変化の様子を、発掘調査成果から考えます。



発掘調査の様子



僧道範の見聞を記した『南海流浪記』
(洲崎寺所蔵)

▲ 仁治4年(1243)に讃岐国府に立ち寄りました。



現地調査の様子

▲ ボランティア調査員「ミステリーハンター」とともに実施しています。

◀ 坂出平野(坂出市府中町・加茂町・林田町・神谷町・高屋町など)を歩き、地形・地名・水利などを調べています。

讃岐国府の周辺に、どのような施設(国府津・官道・総社・山城など)があったか、また時代とともにどのように変化しながら国府と関わっていたのか、などを考えるための大事な調査です。

発掘調査の成果

讃岐国府跡推定地(坂出市府中町本村^{ほんむら})の発掘調査は、昭和51年(1976)以来、29次にも及んでいます(平成23年度現在)。これまでの発掘で分かってきたのは、飛鳥時代～鎌倉時代(7世紀後半～13世紀)の建物群です。特に平安時代前半(9～10世紀前半)に整備された官衙(役所)^{かんが}の存在と、平安時代末～鎌倉時代(12～13世紀)に新たな形をとって現われる建物群が注目されます。

飛鳥時代

7世紀後半頃



ほったてぼしらたてもの 大型掘立柱建物 29次

梁間3間・桁行7間、床面積約60㎡の大きさは、讃岐の古代の建物としては大型のものです。やや小高い場所を選んで建てられています。建物の向きは正方位(正確に東西南北を向く)であり、周囲200mほどの範囲で同じ向きの建物や溝が見つかっています。

建物群が国府の施設かどうかは年代的に微妙であり、その評価は今後の課題です。

奈良時代

8世紀頃

そうばしらたてもの 総柱建物 倉/4次

梁間3間・桁行4間、床面積約45㎡で、柱をすえた穴の中には柱材が残っていました。

外側の柱は梁や桁を支える通し柱ですが、内側の柱は床(おそらく高床)を支える束柱^{つかしら}だったと推測されます。周囲には、同じ規模の倉が並んで「正倉院^{しょうそういん}」をなしていた可能性もあります。



大溝 29次



焼土坑 しょうどこう 29次

開法寺^{かいほつじ}の建立(7世紀末～8世紀初頭)に伴う排水路と見られる大溝や、鼓岡^{つづみおか}の斜面に作られた鍛冶炉^{かじろ}などの可能性をもつ焼土坑が見つかりました

平安時代

9～10世紀



築地 ついで 7次



区画溝 29次

▲ 1町(約109m)程度の範囲を区画する施設と推測されます。築地は区画の北側を、区画溝は区画の西側に作られているようで、区画溝の周辺ではいいな整地が行われているため、本来は築地だった可能性もあります。いずれも10世紀前半には埋まり始め、12世紀には完全に埋没してしまいます。

区画に伴う瓦

(破片から推定復元)

7・29次

➤ 築地と区画溝で囲まれた部分から、特徴的な文様をもつ瓦が見つっています。おそらく9世紀前半頃に作られたもので、これまで県内の古代寺院では同じ文様の瓦が見つかっていないことから、国府専用に作られたものと考えられます。

瓦葺きの建物があったことを示すもので、国府の中でも重要な施設であったことがうかがえます。



石製巡方 せきせいじゆんぼう 帯の飾り具/29次

▲ 区画から見つかったもので、古代の役人の身分表示として使われました。サヌカイトで作られており、平安京や長岡京で製作工房が見つっています。

石組と礫敷き

28次

➤ 7・29次の区画よりも北側で、道路側溝の可能性をもつ溝が見つっており、溝の埋没後に石を組み、礫を敷いています。道路に関わる施設の可能性があります。この道路は、国府と林田の津(国府津)をつないでいたと考えられます。



古代の文字



墨書土器「益」ほくしょどき「さかづき」 8次/9世紀



刻書土器「夫」こくしょどき 28次/8世紀

▲ 谷筋から見つかった墨書土器は、周囲での饗宴の場(たとえば国司館など)の存在をうかがわせます。また生産地で字を彫りこんだと見られる刻書土器は、近くの倉などにかかわる労役者や役人などに供給されたのでしょうか。

平安末～鎌倉時代

12～13 世紀頃



掘立柱建物 27次

この時期の建物は国府推定地内の各所で見つかリ、当時貴重だった口ウソクの使用をうかがわせる土器も多数出土しています。僧道範の見た中世の国府=留守所にかかわる遺構と遺物でしょう。

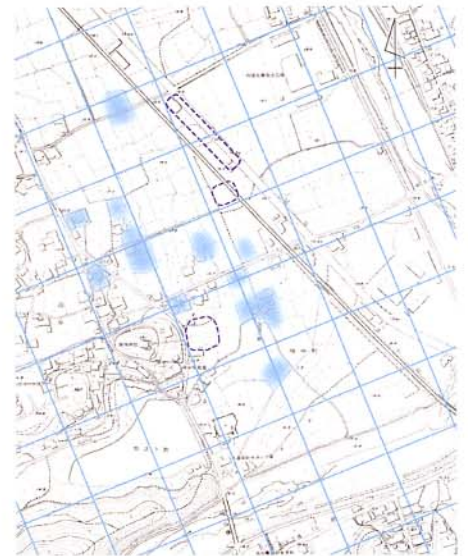
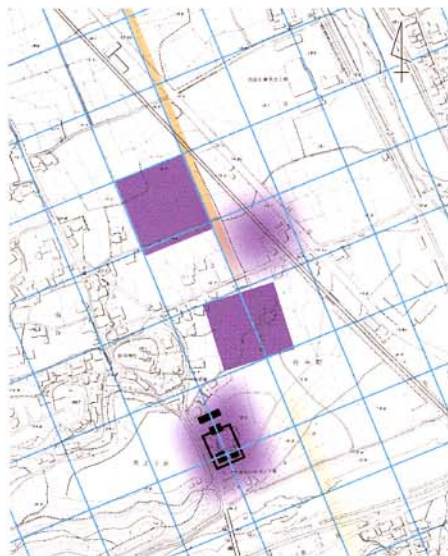


燭台形土器 しょくだいがたどき 28次

変化する景観

古代(左)と中世(右)の国府イメージ図

➤ 条里型地割じょうりがたまわりに合わせて広い敷地が配置される古代(8～10世紀)と、密集する小さな屋敷の集合体である中世(12～13世紀)。対照的なあり方は、その時代の統治のしかたのちがいを表していると考えられます。



見えてきた
讃岐国府跡

2012年(平成24)3月27日発行

〈編集・発行〉香川県埋蔵文化財センター

〒762-0024 香川県坂出市府中町字南谷5001-4

Tel:0877-48-2191 Fax:0877-48-3249

E-mail:maibun@pref.kagawa.lg.jp <http://www.pref.kagawa.lg.jp/maibun/>